

<授業実践1> 「現代の国語」 話すこと・聞くこと

1 指導と評価の計画

科目名	現代の国語	学年類型	1年	単位数	2単位	話すこと 聞くこと	○
単元名	言葉の定義を話し合おう					書くこと	
教材	鷲田清一「真の自立とは」					読むこと	
単元の評価規準							
知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度			
言葉には、認識や思考を支える働きがあることを理解している。((1)のオ)		「話すこと・聞くこと」において、論点を共有し、考えを広げたり深めたりしながら、話し合いの目的、種類、状況に応じて、表現や進行など話し合いの仕方や結論の出し方を工夫している。(A話すこと・聞くこと(1)のオ)		言葉の定義を話し合う活動を通して、話し合い活動が円滑に進むように、自らの役割を果たそうと努めるとともに、積極的に他者の意見を取り入れ、自らの考えを深めようとしている。			
主たる言語活動							
「大人」とは何か、その定義について話し合う活動							

時間	授業のねらい・学習活動	重点項目			評価方法
		知	思	態	
1 ・ 2	単元の目標についての理解を深める。	○	○		記述の点検 (授業プリント)
	①論理的に物事を考える上で、定義の重要性を理解する。 ②授業プリントを用いて、定義の例を確認する。 ③教科書「真の自立とは」を読み、議論の中で定義をどう深めることができるのかを確認する。				
3	話し合い活動に向けて準備をする。			○	記述の点検 (ワークシート)
	④話し合い活動で何が大事であるのかを考える。練習として「グローバルとは何か」を考えてみる。 ⑤ワークシートを用い、自分なりの「大人の定義」を考える。				
4	「大人」とはどのような人か、話し合い活動を行う。	○	○	○	行動の確認 (グループでの話し合い活動)
	⑥グループで「大人の定義」について話し合いをする。 ⑦グループメンバーの意見を基に、分類・整理を行う。 ⑧グループの中で「大人の定義」について、共通の見解をつくる。				

5	活動を振り返る。		◎	◎	記述の分析 (ワークシート)
	⑨自分の中で「大人の定義」がどのように変容したのかを振り返る。 ⑩話し合いが円滑に進むように、どのように取り組めばよいのかを考える。				
	⑪定期考査	◎	◎		定期考査

※重点項目の欄について、指導に生かす評価には「○」を、記録に残す評価には「◎」を付す。

ルーブリック

	A	B	C
思考・判断・表現 (第4次)	話し合いを通じて「大人の定義」について多角的に考えるとともに、話し合いを円滑に進めるために具体的な工夫をしている。	話し合いを通じて「大人の定義」について考えるとともに、話し合いを円滑に進めるための工夫をしている。	話し合いの中で「大人の定義」について考えるとともに、話し合いをしている。
	LV3	LV2	LV1
主体的に学習に取り組む態度 (第4次)	学習の調整(態度α) 話し合いの中で、他者の意見を具体的に取り入れ、自らの考えを深めようとしている。	話し合いの中で、他者の意見を取り入れ、自らの考えを深めようとしている。	話し合いの中で、他者の意見を聞き、自らの考えを深めようとしている。
	粘り強さ(態度β) 話し合い活動に対する振り返りを十分にを行い、自他の発言について、そのよかった部分を複数挙げようとしている。	話し合い活動に対する振り返りを行い、自他の発言について、そのよかった部分を挙げようとしている。	話し合い活動に対する振り返りを行い、自他の発言について考えようとしている。

主体的に学習に取り組む態度 総合評価シート

[態度α] 自らの学習を調整しようとする側面	LV3	B	B	A
	LV2	B	B	B
	LV1	C	B	B
		LV1	LV2	LV3
		[態度β] 粘り強い取組を行おうとする側面		

2 研究の実際と考察

(1) 研究の実際

最初の授業では、話し合いのための事前準備として授業プリントを用い、論理的な文章における言葉

の定義の在り方について理解を促した。続く2時間目では、「自立」をテーマとした教科書本文の読解を行い、筆者による言葉の定義について概観した。その上で3時間目では、話し合いの準備として「大人とは何か」について、各々自分なりの定義を考える活動を行った。その際、学習者が1年生であり、高等学校における本格的な話し合い活動が初めてであることを鑑みて、話し合いをする上で注意すべきことを参考資料として示した。具体的には、「全員が一回は必ず発言をすること」「話し合う相手の意見を頭ごなしに否定しないこと」といった内容である。また、思考ツールの使い方についても紹介した。話し合い活動は、発言力のある生徒や意見の明確な生徒の意見が中心にならないように気を付ける必要がある。したがって、生徒には「大人の定義」が話し合いのテーマであるものの、今回の活動は話し合いの仕方や結論の出し方を学ぶことが目的であることをあらかじめ確認し、より協働的に話し合っ、合意形成をするよう促した。

4時間目の冒頭では、KJ法を用いて「大人とは何か」という命題に対する生徒個々の考えを集約し、グルーピングする活動を行った。話し合いの中では、「免許が取れる」「収入の見込みがある」といった社会的、経済的な定義から、「物事を冷静に考えたり、対処できたりする人」「気遣いのできる人」といった精神的な部分における定義までさまざまな意見が活発に出された。付箋を使い意見が可視化されたことで、その後のグルーピング活動でも短絡的にまとめることなく、「精神的自立」「社会的」などと自分たちの言葉でまとめていく様子が見られた。授業後に行った振り返りでは、「違う言葉や表現を使っても同じことを言っているということがあった」と気づきを得た生徒もおり、自分たちの認識の違いを確認し調整しようとするなど、協働的に活動が進められていた。

後半では、考えを更に深めていくツールとしてフィッシュボーンチャートを用いた。KJ法でグルーピングをした要素をフィッシュボーンの大骨の部分に書き、小骨の部分に具体的な要素を書き入れて整理するよう指示した。活動を観察していると、話題が整理・可視化されたことで、生徒たちは他者の意見を受け止めやすくなり、話し合いがより活発になったように感じた。他者の意見を取り入れた上で自分の考えと照らし合わせ、合意形成に向けて調整する姿勢が見られた。

(2) 評価について

本研究では、話し合い活動後のワークシートの記述を基に評価を行った。生徒個々の記述の変化も合わせて見たとき、合意形成に向けて調整する姿勢を見せた生徒の振り返りには、「出た意見に対して似たような意見は一つにまとめて、できるだけ簡潔にすることが大切だと思った。振り返りでは、また何個かのグループに分けてまとめて『見える化』して分かりやすくするのも大事だと思った。『見える化』した時に、分かりやすくグループに分けられて、一番大事だと思った意見に視点を当てることができ、結論を出すことができた。そうすると自分の意見は『成人式を終えた人』という社会から見た定義にしたけれど、グループの結論は、『社会活動をするために自ら行動し、自立している人』という行動に視点を当てた結論になった」と記述されていた。この記述から、話し合いをより有意義にするための方策について具体的に触れ、気づきを得て工夫を重ねながら粘り強く合意形成に向かったものと判断し、「思考・判断・表現」の観点においてA評価とした。

また、話し合いの結果として出された定義については、話し合いをうまく進めた班ほど、他者の意見を具体的に取り入れ、自らの考えをまとめたり深めたりする工夫が見られた。例えば、「最初結論をよくばって長くしようとしたが議論をしていくことでより簡潔に短くすることがよいと気付いた」と記述する生徒がいた。この生徒は、実際に定義が「大人とは、自分の行動に責任がとれる人」と簡潔にまとめることもできており、話し合いの中で結論の出し方に工夫ができていたと思われる。今回は話し合いの工夫に焦点を当てた活動であるので、定義そのものの内容ではなく、話し合いの中でどのように自らの

考えを深めることができたのかが具体的に書かれていることを重視した。「議論をしていくことでより簡潔に短くすることがよいと気付いた」といった話し合い過程における気付きとともに、定義の変化が見られた生徒については、「話し合いの中で、他者の意見を具体的に取り入れ、自らの考えを深めようとしている」と判断し、主体的に学習に取り組む態度の「学習の調整」の側面においてレベル3の評価とした。

3 成果と課題

今回の実践は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に関する研究について、「話すこと・聞くこと(1)のオ(話し合うこと)」の指導項目に基づいて授業を行った。学習者が1年生であり、本格的な話し合いの経験が少ない状況であったため、手探りで始める部分が多かったが、生徒たちは工夫しながらさまざまな案を出し合い、意見調整しようと努力する姿が見られた。

今回は、主にワークシートの記述を用いた評価を行った。生徒の活動の様子や振り返りの内容を見ると、「個別最適な学び」を実現するために個々の考え方の変化を記述から捉える試みは、一定の成果があったと言える。一方で、「大人の定義」に関する記述の変化と、「話し合い方法の工夫」に関する記述との、その両方を踏まえて評価しなければならないという難しさもあった。記述の変化だけを見るのであれば評価もしやすいが、それでは話し合いそのものの評価という観点においては不十分である。より適切な評価につなげるためには、話し合い前の準備段階で今一步工夫が求められる。例えば、話し合いに入る前に、「話し合いについて自分が取り組みたいこと」を述べ、活動後にその点を振り返る展開にすれば、話し合いの中身にかかわらず、より適切な評価ができたと考える。

また、今回はICT機器を用いなかったが、ICT機器を用いることで、より円滑な活動ができるように工夫することもできる。フィッシュボーンやKJ法などはデジタル上でも用いることができ、評価の際に役立てることができたはずである。さらに、回収や配付などの時間を短縮することで、話し合い活動の時間をより多く取ることができた可能性もある。今後も、今回の授業実践を生かして、よりよい話し合いの在り方について模索していきたい。